

滑川忠夫先生の御逝去を悼む



京都大学名誉教授・愛知学院大学教授の滑川忠夫先生が、昭和50年3月5日に逝去された。2年程前から心臓を患い、2回にわたって入院治療されたが、今年2月中旬までは、比較のお元気で京都から名古屋の愛知学院大学へ出かけ教鞭をとっておられた。2月20日、軽い心臓発作で急入院され、一時回復の兆しも見られたが、3月5日、心筋梗塞のため、ついに永眠された。享年77才である。真に哀惜の念にたえない。殆んど苦しまれることもなく静かに息を引きとられたとのことで、このことは関係者にとって、せめてもの救いであった。

滑川先生は1897年12月7日に神戸市で誕生された。神戸二中を卒業後、中央気象台練習部を経て、1916年中央気象台臨時雇として堀口由己所長の下で神戸測候所に勤務された。1918年京大理学部に移り、故志田順教授の下で臨時雇として研究に従事された。1920年理学部の専科生として入学、1924年同地球物理学科を卒業され、同年同講師、1929年に助教授、1947年に教授に昇任され、京大の気象学講座担任として気象学の研究・教育に専念されてきた。1953年、滑川先生は当時の大阪管区気象台長大谷東平氏並びに神戸海洋気象台長松平康雄氏と協力して、日本気象学会関西支部を創設し、支部長となられ、また、同じ頃、気象学会の地方理事にも就任、それぞれ1960年の春までその任に当られ、学会支部活動興隆のた

め精力的に尽力された。更に、1947年以来1955年まで日本農業気象学会近畿支部長として、農業気象学の振興にも努力された。1960年、京大を定年退官され、翌1961年、愛知学院大学の歯学部創設に際し、招かれて同大学教授に就任され、後進の指導に当たってこられた。

故志田順教授の薫陶を受けられた滑川先生の気象学に対する情熱は、物理学としての気象学の確立を目指しておられたといえる。複雑多岐にわたる気象現象を、経験的解釈で片づけることを許さず、物理学的力学的に理解すべく努力された。志田先生ゆずりの学問に対する極めて厳しい態度は、寸鉄人を刺す警句と共に、滑川先生の警咳に接したことのある人の良く知るところである。また、よく通る大きな声で口角あわを飛ばしながら、気象学の議論をされる姿は、学問に対する厳しさと共に、多くの人々の印象に強く残されている。

気圧の微変動の研究は、先生が初めて取り組まれた研究課題であった。志田式微気圧計による気圧変動の観測を10年以上にわたって行なわれ、その研究成果は1934年から1936年にかけて発表された。周期が数分乃至10数分の気圧波を研究され、特にその原因に関する界面重力波の理論は、成層安定度の影響も取り入れたものとして、当時の *Quarterly Journal of the Royal Meteorological Society* などに紹介され、注目を浴びた。

1934年、京阪神を襲って甚大な被害を及ぼした室戸台風について、その通過時の気象観測資料を詳細に検討された滑川先生は、観測事実は台風を単一の渦巻きと考えると説明が極めて困難であることを見出された。台風を二つの渦巻きから成る複合系であると仮定すると、観測事実が説明しやすくなるという、いわゆる主副台風論を提唱された。1935年のことである。これは気象学の常識では直ちに受け入れられるものではないことを、先生は充分承知の上で、観測事実は単一の渦巻きでは到底説明不可能であると考えて、敢えて提唱されたものであった。何らかの仮定の上に立てられている理論よりは、観測事実を重要視して問題に立ち向かうという志田先生ゆずりの探究心の発露であった。

対流による熱輸送の重要性について、1935年に滑川先生は、湖水温度の年変化の議論で指摘されていた。湖水温度の冷却期に、深さに対して温度が殆んど一定であるにもかかわらず冷却することは、単純な渦伝導係数の導

入では不備であり、対流効果を取り入れるべきことを示し、新しい理論を提唱された。乱流現象に関する先生の関心は、1938年、風速の日変化に関する論文として発表されている。当時、渦粘性係数の日変化を導入した G.I. Taylor の準静的理論があったが、これを力学的理論に拡張し、実状との良い一致を得ている。滑川先生の研究論文は、雲物理学にまで及んでいる。それは1937年に発表された雨滴の蒸発に関するものである。動いている空気中の雨滴の蒸発が、その表面積に比例するのではなく、半径に比例するということが、実験的にまた理論的に示したものであった。

滑川先生は、学術論文を執筆されるのに極めて慎重であった。そのために、論文の数は多くはないが、しかし、研究活動は上記のもの他に、教え子の研究指導という形で晩年まで絶えることなく続けられた。1940年代、1950年代には、微細気候学の体系づけに努力された。早くから乱流輸送の重要性に着目され、観測により現象を正確に把握することの意義を強調された。そして学問的な研究と同時にそれを実社会の問題に正しく応用することにも積極的な姿勢を示され、各方面からの要望に応じて温水池の効果、人工融雪、貯水面からの蒸発、斜面の夜間冷却、大気拡散などの問題も手がけられた。しかし、その間にも常に学問的な正しさを要求され、安易な妥協は許されなかった。局地気象学にも深い関心をもたれ、鳴門海峡の強風に注目して観測を指導され、建造物の設計に対する基準風速の設定に対して大きな指針を与えられた。また、山岳地帯の降雨、降雪の分布にも注意を向けられ、黒部川第四発電所あるいは木曾川三浦発電所の貯水池の水運用計画や山岳地の積雪調査などに

も関係された。このような点で、滑川先生はいわゆる Engineering Meteorology の研究を日本において最初に着手されたと云っても良いのではないかと思われる。1950年代の後半、河川水温調査会設立にともなって、その一専門部分である熱収支部会の部会長になられ、河川水温の成立機構解明に指導者の役割を果たされた。若い者に指示を与えるだけでなく、必ず山の奥深い現地までも足を運ばれ、立地条件まで具さに見られた。同調査会における昭和38年北陸豪雪の融雪出水調査の折には、請われて調査班の主班となられ、2メートルを超える積雪に自から入られ指導に当たられた。

滑川先生は、研究活動、教え子の研究指導はもとより、講義にも大変力を入れておられた。御自分で最近の研究成果を取り入れたノートを絶えず用意されて、刻明に記されたプリントを学生に配布されていた。このことは亡くなられるまで続いた。先生の早口での講義は、学生が直について行けなかったが、後世に悔を残さないような講義をしたいと常に口にされていた。その講義のノートは、在世中にはついに印刷されなかったが、熱心な学生は大変高くなっていった。

京都の大学関係者には、ソフト帽をややあみだにかぶり、着流し、下駄ばきで京都の繁華街を散歩される先生のお姿は馴染み深いものであった。亡くなられてしまった今でも、新京極や河原町辺を、ステッキをもって足早に歩かれ、パチンコ屋にすっと入って行かれるお姿が見かけられるのではないかと錯覚しうるのである。

心から、先生の御冥福をお祈り申上げる。

(山元龍三郎・星合 誠・光田 寧)

第22回 風に関するシンポジウム講演募集

標記シンポジウムを下記の通り開催いたしますので奮ってご応募下さい。

開催日：1975年11月12日（水）

会場：農林省農業技術研究所講堂（東京都北区西ヶ原2-1-7）、（京浜東北線上中里駅下車徒歩約5分）。

共催学会：地震学会・土木学会・日本海洋学会・日本気象学会・日本建築学会・日本航空宇宙学会・日本地理学会・日本農業気象学会（幹事学会）・日本林学会。

講演申込方法：題目、講演者氏名（連名の場合は講演

者に○印）、勤務先（電話）、100字程度の要旨を記入。

講演申込先：〒114 東京都北区西ヶ原2-1-7 農業技術研究所気象科真木太一（日本農業気象学会、風に関するシンポジウム係）。

講演申込締切日：1975年7月15日（必着）。

講演時間：1講演15分程度。

懇親会：終了後地下食堂にて開催予定。詳しくはプログラムに記載。

その他：前刷集は作成致しません。